

〔東洋の漆工展によせて〕

沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒

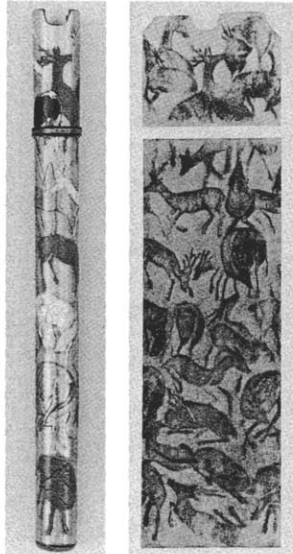
伝本阿弥光悦作 江戸時代初期 長39.7 重要文化財

日本美術史上には、狩野派、土佐派など多くの画派があります。それぞれの画派に属する絵師達は、本格的な絵画を制作する一方、貴顕の要請に応じ、しばしば、工芸作品の下絵図案を手掛けました。

その中には、琳派のように、独特な工芸作品を生み出した画派もあります。琳派とは、俵屋宗達を祖とする画派で、江戸時代を通じ、装飾性豊かな作品を数多く残しています。琳派の絵画作品と工芸作品には、単なる意匠の共通性を越えた、密接な関係が窺えるのです。これは、琳派という画派の性質を考える上でも、非常に興味深い問題であります。

日本の漆工展に出品される沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒は、そういった琳派工芸作品の一つです。この作品は、本阿弥光悦作と伝承されています。光悦は、江戸初期

沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒



に独自の書流を興こし、一世を風靡した人物です。宗達と交流があり、宗達の下絵に、光悦が筆を染めた書巻が数多く残されています。

光悦が、実際蒔絵の制作に携っていたことは、自筆の消息によって分かります。それに拠りますと、どうも、注文主と蒔絵師達を仲介する、言はば、現在のアートディレクター的役割を果たしていたようです。

この作品には、沃懸地と呼ばれる、細かな金粉を敷き詰めた其上に、金金貝で5頭、金高蒔絵で9頭、青貝（螺鈿）で4頭、鍍板で5頭の鹿が配されています。この小さな筒状の曲面上、合計23頭もの鹿が納められているのですが、不思議なことに、全く煩雑な印象は受けません。

その原因の一つに、巧みに4種の技法を駆使していることが挙げられます。技法の相違、すなわち、材質の相違は、そのまま、色彩的な相違としても反映されます。

螺鈿の乳白色、鉛の重厚な灰色、同じ金を使用しても、金金貝の光沢ある黄金色と金高蒔絵のやや沈んだ金色とでは微妙に異なります。さらに、その金高蒔絵においても、下地に黒漆を用いるか、朱漆を用いるかによって、二つの色調をり出しているのです。金金貝を占めると、金色だけで実に3つの階調がつけられています。これらの素材がバランス良く全体に配され、彩り豊かな作品となっているのです。

大正時代に出版された「光悦派三名家集」という画集に、この作品から取られた拓本が掲載されています。それを見ますと、実に多様な鹿の姿が写されていることが分かります。軽やかに駆ける姿、草を食む姿、物音に振り返る姿など、見ていて飽きることがありません。



群鹿図 李朝時代 当館蔵

ここで一つ気付くことがあります。一頭の例外を除き、他の鹿がその上下或いは左右の鹿と少しづつ重ねられているのです。単に、鹿の意匠で画面を埋めるだけでなく、鹿の群れとして全体を構成しようとする配慮が現れています。群鹿蒔絵という名称も、なるほどと頷かれます。

鹿は秋の典型的なモチーフとして、多くの和歌に詠われてきました。古今和歌集にも、「奥山の紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」という猿丸大夫の有名な和歌が収められています。その中でも、このような鹿の鳴き声に言及する和歌が大半を占めることが意を引きます。笛筒の意匠に鹿が選ばれたのは、もちろん鹿自体が文学的情趣を多分に含む意匠であることもそうですが、哀愁を帯びた鹿の鳴き声に、笛の音と通じ合う感興を受けたからではないでしょうか。

ともあれ、このような文学的背景の下に、鹿の意匠は絵画や工芸作品にしばしば採用されます。しかし、この笛筒ほど多様な鹿が表現された作品は、日本美術史上あまり例がありません。この作品に、直接手本となる絵画があったと想像しますと、それはむしろ中国絵



『光琳百図』江戸時代後期

画、或いはその影響を受けた朝鮮絵画の中に求められるのです。

中国では古来、福・禄・寿の三つを得ることが幸福の証しと考えられてきました。ところで、鹿は音読しますと禄に通じることから、「百鹿図」、「群鹿図」という吉祥的な寓意画が生まれたのです。

それらの作品には、さまざまな鹿の姿が写されており、中には笛筒と全く等しい姿勢をとる鹿も見受けられます。興味深いことに、江戸時代中期に琳派を復興した、尾形光琳の描く「百鹿図」が、彼の傾倒者である酒井泡一が刊行した『光琳百図』に見られます。

また、笛筒の最下段に、砂浴びでもしているのでしょうか、仰むけになって躰をひねる鹿がいますが、この特色ある姿勢も、中国絵画における馬の描写にしばしば見いだせるものなのです。

芸術作品では、表現すべき新しい題材が現れると、技術が飛躍的に進歩することがあり、一群の琳派の蒔絵にも同様のことが言えます。伝統に固執することなく、造形的魅力を感じれば、積極的に取り込んでいく。そういう開かれた精神が、この笛筒のような生動感溢れる作品を作り出したとも言えるのです。 (中部義隆)

季刊 美のたより No.85

昭和 63 年 11 月 11 日

発行 大和文華館